

令和 6 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
総合型選抜（第 1 回）

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題

次の文章は、文化人類学者である高木玲（たかぎりょう）さんが、異文化・国際理解について述べたものです。高木さんの意見を要約し、それに対するあなたの考えを600字以内で述べなさい。

本来、私たち人間は異なるものに対面した時、一方で慎重に警戒しながらも、他方では多かれ少なかれ何らかの好奇心を抱くことが多いだろう。そうした異なる対象に対する知的な好奇心や探求心は、誰にでも備わっているものである。そして、見慣れない、聞き慣れない異なる対象を、異なるものとして少しずつでも理解していく過程は、楽しいことともなるだろう。なじみの薄い異文化・国際＝他者と出会ったときも、これと似たような過程をたどる。当初、それが何であるかわからないだけに、好奇心をつのらせ、何とか理解したいと願う。そして時間を経るにつれて、そうした他者が、異なるものではあるけれども、次第におぼろげながら理解可能な姿形をとってくる。こうした異文化・国際理解＝他者理解の過程は、本来、まさにワクワクするような心躍る楽しい経験なのである。

しかしながら他方で、他者を理解する心躍る楽しい過程には、ともすれば易きに付いて陥りがちな罠も隠されている。それは一面で異文化・国際理解＝他者理解の困難さとなる。

他者理解の陥りがちな罠、困難さとは、簡単にいえば、メディアなどで一般に流布しているレッテル貼りでわかったつもりになってしまうことである。私たちは、何らかの対象を認識するとき、ごくシンプルな言葉や表象でもって、その対象をカテゴリー分けし、理解しやすいなじみの認知枠組みで捉えようとする。特に自文化との違いを強調して、異文化に対する安易な表象やレッテル貼りをを行うことが多い。

例えば、筆者の調査地であるタイに関して例をあげてみよう。具体的にタイという国を知らない人でも、メディアで紹介されているタイに関するキャッチフレーズ的な表現はどこかで耳にしたことがあるのではないだろうか。「微笑みの国」「仏教の国」「国王のいる国」「ムエタイの国」、そして近年は「政治的に混乱している国」など、主にメディアで取りあげられる頻度によって、タイという国の表象やレッテル貼りだけが一人歩きして世間に流布されていく。

このいずれのタイに関する表象も間違いではなく、事実としては一面で正しい。しかしながら問題は、これらのレッテル貼りがシンプルであるからこそ、過度に大きな力をもってしまい、こうした表象のみで、異文化・国際＝他者を理解したつもりになってしまうことである。確かに「仏教の国」タイという指摘は、それなりに正しいのだが、他方で、タイでは仏教が多く信仰されているという指摘だけで理解できるほど単純な宗教構造でもないのである。

そこに潜んでいる他者理解の罠とは、キャッチフレーズ的なレッテル貼りでわかったつ

もりになり、そのことがより深い他者理解への入り口をふさいでしまうことなのである。わかったつもりになって、その先にある、タイにおける具体的な宗教実践のあり方などに関するより深い好奇心探求への扉をみずから閉ざしてしまう危険性が、そこには孕^{はら}まれている。

異文化・国際＝他者とは、そのような簡単なキャッチフレーズだけで言い尽くせるような底の浅いものではない。本来、長くつきあえばつきあうほど、他者との差異が際立ってきて、ますます好奇心と探求心を駆り立てられるような奥深いものなのである。

（高木玲 編著「大学生のための異文化・国際理解」による・一部省略がある）

（注） ※ 表象 … 代表するもの。別の表現であらわされたもの。